

市民プレス

平成31年
(2019年)
4月5日
第84号

発行人 「市民フォーラム」
編集人 原 昭二
制作 デジタル工房
TEL 090(3048)5502
〒353-0004
埼玉県志木市本町 2-4-43
E-mail
hara@camelianet.com



市民の目線で市民が発信する地域情報紙

WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com

CONTENTS

- PAGE 1
深谷良男氏が記した・・・
「特攻隊員村山光一 比島で戦死！」
『郷土志木』二十七号より
- PAGE 2
村山光一は前線へ 光一の甥は語る
終戦の前年、太平洋を戦域として、
日本の敗色は濃く、レイテ沖海戦で
- PAGE 3
七三戦隊の追悼史を読んで・・・
パラワン水道で、大きな悲劇が・・・
上陸するマッカーサー
エンガノ岬沖海戦 スリガオ海峡夜戦
- PAGE 4
村山光一の幼な友達・・・
サマール沖海戦
大岡昇平著『レイテ戦記』を読む

疾風（はやて）



陸軍から、大東亜戦・決戦機として発注され、中島飛行機株式会社で製造された。正式な名称は「四式戦闘機」、略称は四式戦、四戦、愛称は疾風。対戦したアメリカ軍からは、the best Japanese fighterと評価されたが、部品の不良・不足、整備力の低下などのため、稼働率が余り高くなかった。

所沢飛行場最後の疾風 73 戦隊

『郷土志木』二十七号より

(右に見える二人のうち、左が村山光一という)



特攻隊員村山光一 フィリピンで戦死！

村山光一は、陸軍の飛行士として、第二次世界大戦が終結する前年十二月に亡くなった。

郷土史家として、『郷土志木』誌に健筆を振るわれた深谷良男氏は、村山光一の人となり、家庭と家系などの言い伝えを聞いて強い感銘を受ける。直ちに詳細な聞き取りをする傍ら、当時の世情、動向を的確に捉えて論文を執筆された。

本稿は、『郷土志木』二十七号(平成十年1988)に掲載された、深谷氏の論文を転載して、深谷氏が詳細に記された、終戦直前の歴史をも振り返ってみたい。以下、本文に移って、

精華特攻隊員村山光一 比島に戦死す 深谷良男

私、深谷が志木市にお世話になったのは昭和十六年から、十六歳の時である。

当時の志木は人口九千人ぐらの小さな田舎町だった。たとえ戦前とはいえ、熊谷市、川越市などと比べると、夜など誠に暗い町で、東上線は二輛編成

ドアーは手動、志木までは複雑だが、志木より先は単線だった。

昭和十一年、関東地方に雪が降った。この年は例年になく雪の多い年で、二月二十六日、当時、私は熊谷市の小学校六年生で、試験勉強とか残り勉強と言って、

中学や商業学校を受ける児童の補習を受けていた。先生の補習は全くの奉仕で、無報酬、今のビジネス先生とは大分違って居たのである。

当時、熊谷には陸軍飛行学校があり、泣く子も黙る憲兵隊の分遣隊があり、隊長は准尉さん、外に五名位の隊員がいた。

二十六日の朝、宮坂憲兵隊長を父に持つ同級生が「今朝お父さんが非常召集で東京に行った」と言うので、なんだか子供には分からないが心配した記憶がある。これが天皇の軍隊が反乱を起こした、二二六事件であった。

この事件の延長として、軍部大臣の現役制が復活し、政治に介入してくるのである。しかしこのころ三菱重工は木炭車の開発を始め、理科学研究所では仁科博士がサイクロトロンの建設を始めるのである。

昭和十二年、陸軍主導の林銑十郎内閣誕生、鈴木茂三郎らによる日本無産党の結成、七月に

は盧溝橋事件、八月には上海事件、十一月には大本営設置と戦争にのめりこんで行くのである。愛国行進曲が瀬戸口藤吉により作曲されたのはこの頃である。

昭和十三年には国家総動員法が布告され、「蒋介石を相手とせず」と言いながらガソリンは切符制、綿製品の販売禁止となり、物資は欠乏し始め、国民の間に「闇物資」という嫌な言葉が生まれてくるのである。それでも国民は騙され続けていた。火野葦平の「麦と兵隊」の本や映画を見て感激に浸っていたのである。

日中戦争の起るまでの日本は国も国民も貧乏だった。この頃、志木の町で上の学校に進学した人は別として、多くの児童は高等科に進み、卒業後は問屋さんなどへの奉公が圧倒的に多かった。中には高等科へも進まずそのまま奉公に行く子も多かったのである。

陸軍飛行軍曹の村山光一は、今までに述べた昭和の変革期に青年に成るべく、大正十二年志木町に生まれた。

父は村山左右衛門、母は、はつと言った。村山家は跡継ぎは代々豊太郎を名乗ったという。だから長男貞蔵を豊太郎とも書いてある。

光一には兄弟が多く四番目の兄に栄三郎がいる。光一は六男である。ここでは光一が一番慕っていた栄三郎のみを記載して、他の兄弟姉妹は除いておく。母はつは明治十五年一月の生まれ、夫以上に健康で、体力に恵まれた女性だったらしい。六男三女に恵まれている。

大正十二年八月二日に生まれた光一は昭和十一年高等科に進み、同十三年三月に卒業する。卒業時の作文には久喜の問屋に奉公に行く」と書いてある。しかし光一は久喜には行かなかったようだ。光一は、立川辺りにあった陸軍航空廠に勤めていたらしい。そのころ、町の掲示板に張られた陸軍少年航空兵の募集を見て応募したらしい。

光一の運動能力は抜群で、握力が特に強く、試験官が握力のあり過ぎに不審を持ち再検査をしたところ、前にも増した数値が出たという。



光一の飛行機への憧れは相当のものだったらしく、陸軍を受ける前に海軍の航空兵を受験していた。このとき肺活量の不足で不合格、その無念さを光一は書き残している。作文は立派な文章で、漢字を多く使っており、

頭脳明晰であった光一を彷彿とさせる。海軍の航空兵を受験したときの成績は国語算術共に一番で、試験官も残念がったとのことである。試験は恐らく浦和市で行われたに違いない。

光一は陸軍に所属する

東京陸軍航空学校教育隊第七中隊第四区隊第八内務班、これが光一の所属であった。ときは昭和十五年四月一日。

十六年三月二日 同校卒業

同年四月二日 大刀洗陸軍飛行学校教育隊に入校

十七年二月一日 生徒の課程終了(アカトンボ)

第十期少年飛行兵に採用 陸軍上等兵となる。

明野飛行学校助教をもつて飛行第七三戦隊を編成

北伊勢にて第七三戦隊を編成 陸軍四式戦闘機

第七三戦隊 所沢に終結 一戦隊は四十数機

所沢終結の時期は今となっては、はっきりとしないが十月半ばであったろう。

光一の所属は、南方軍第四航空軍と言って、司令官は富永恭次陸軍中将だった。高級司令官としては人格的に疑問のある人物であったらしい。

四空軍直轄の航空軍に三飛行団があり、それが二十三個の飛行戦隊に別れていた。

光一の属する飛行団は第二二飛行団で指揮官は吉岡洋中佐。所属の戦隊は第七三戦隊だった。戦隊長は陸士五一期の三隅輝雄少佐で、深谷の同期生が陸士五七期であるから、三隅少佐は光一より六歳年上になり、まして陸士出であれば神様以上の人であったろう。私が歩兵として教育を受けた時の教官は二歳上だったが、とても二歳上には見えなかった。

因みに飛行七三戦隊とマニラに於いて同一行動をとり全滅する飛行七二戦隊も所沢に終結

比島に向かっている。戦隊長は小川小二郎大佐だった。

この頃の日本は全くの負け戦であった。大本営は負け戦の退却を転進と呼び、飽くまでも敗戦を隠していたのである。サイパンが落ち、テニアンが落ち、レイテ湾では栗田艦隊が不思議な反転をして、アメリカ軍の上陸を許していた。

海軍は十月二十五日、初の海軍神風特攻隊を出撃させた。もうどうにもならなくなったのである。

海軍が特攻隊をだすと自らは飛び込む事のない参謀達は、海軍に遅れマジと帝都防衛に取っついておいた虎の子の、ハヤテの第七三戦隊に比島への出動を命令するのである。かねてよりの覚悟は出来ていたとは言え、志木の生家のすぐそばの所沢から比島に行く光一の心境は、察するに余りあるものがある。光一時に二十歳の青年である。今成人式を晴れ着で迎えられる今日の若人の何たる幸せの事か。

死闘の比島で・・・

昭和十九年十二月十三日、ミランダナオ島の監視哨は北方八〇キロに敵の艦船約八〇隻を確認

した。空中からの偵察でも、中型輸送船一〇隻、上陸用舟艇七〇隻、護衛艦一〇隻と云う大船団であった。大小の島々よりなる比島の周囲は、海と空を制したアメリカ軍のなすがままの状態であった。陸軍も海軍も数機の特攻を出し、若い命を散らせたが、アメリカ戦史によれば、軽巡洋艦、駆逐艦それぞれ一隻が損傷を受けた程度であったという。この程度の特攻では、米軍の進撃を止めることなどできなかったのである。

夕刻にはネグロス島方面に大船団を発見、富永軍司令官は第五飛行団の全力をあげての特攻を命じたのである。

(菊水隊)と命名された特攻隊は、こうして十四日未明、クラークを出撃し、全機未帰還と成る。この時の飛行団長の小川小二郎(次)大佐は攻撃隊長に「無理に体当たりをしないよう、弾を落としたらすぐ帰ってこい」と指示をしたのである。しかし隊員の士気はたかく、搭乗員は下着を取り替えたという。この時、七四戦隊は九機、乗員四九名であり、二名の不時着者を除いて全員戦死したという。

光一 前線へ

十九年十二月十二日の村山光一。疾風六二号機にて台湾経由、マニラに向かう。今となつては日にちは解らない。止むを得ない事だ。

十二日の幾日前の日、光一が最後の挨拶に志木の空に飛んできた。富士屋さんの前の森田食料品店の森田梅代さんは志木短歌会の重鎮だ。

この森田さんは次のように光一について思い出してくれた。

フジヤさんのすぐ近くの横内敏男さん(光一)より一寸若い森田さんの長男と次男

みんな覚えていて呉れたよ

あんたが飛行機から身を乗り出して見てくれたのを私はあなたの目の白さまで覚えているよ

光ちゃんはホウレン草が好きだったね

光ちゃんの器械体操は志木一番で、大車輪ができたのは

光ちゃんひとりだったよ

いろは橋の欄干からの飛び込みもうまかつよ。できたのは

二人か三人ぐらいだったね

あのときさー

光ちゃんのオッカサンは嬉しさ一杯で泣いてたよ

終いには二階の屋根に上つて目の丸を振っていましたつけ

いい子だったもね いい子だったね

生きてりや 七三か七四になる筈だったのにねー

光ちゃんの友達みんな出来た子だった。宮川本屋の前の

旦那もよくできた人だった。西川(真一郎)医者も同じ年

吉野(呉服屋 今はいないようだ)さんもあれから海軍の飛行機に乗つて、戦死をしてしまったよ

いい子は寿命が短いね 生かしておきたかつたねー

かわいそうな事をしてしまったねー

今になりやー 戦争なんかについて死んだひとは

ばかー みたねー

.....

光一最後比島サンホセに散る

十二月三十日サンホセ(ミンドロ島)に長さ一九〇メートルの滑走路ができあがつた。来るべきルソンの作戦は指導性にか

ていた。なにをしても後手後手であった。台湾と比島の間バシー海峡は米軍の完全掌握下、内地より送られる兵士も物資も機動艦隊の餌食となり、空輸される飛行機すら安心して昼間は飛べなかつた。

十九日夜、七期久永軍曹、十期村山軍曹はサンホセ沖の艦船群に、万葉隊の鵜沢軍曹、若桜隊の余村伍長の四機が突入した。

光一には申し訳ないが戦局を左右するほどの戦果は期待出来なかつたろう、と思うのである。「弾を落としたら帰って来い」と言う上級指揮官が欲しかった。

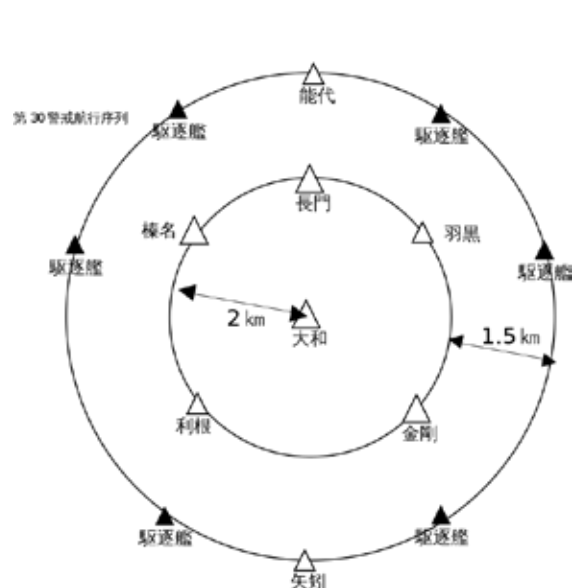
この頃の私、深谷は千葉県の寒い掘つ建て小屋の兵舎で教育を受けていたが、雨で訓練のない学科の日に決まつて教官が言っていたことは「犬死はするな」と言うことだった。生きて生きて最後まで生きてお国に尽くせと言うことだった。

このころの戦線はどこも退却退却で、ヒモジサと疲労に負けて手榴弾で自殺する兵隊が増えて困っていたのである。

この頃、行軍中に歌う軍歌の『戦友』が禁止された。その理由は分からないが、ソロソロ軍の上層部の中に敗戦と言う意味が分かり始め、弾を落としたら帰って来い、と言う指揮官が増えたのでは無いかと考えている。

光一の甥 村山公一

公一の父は村山栄三郎という大正五年の生まれである。光一とは七つ違いの兄になる、光一が一番慕っていた兄のようだ。栄三郎の妻は「とり」と言う。四九船の田中さんの娘さんである。若いとき奇麗だったそう。この公一が大の光一最良、叔父



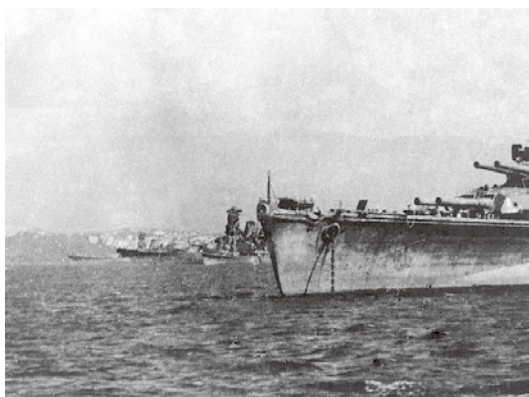
1944年10月25日。第七戦隊戦闘詳報によるサマル沖海戦後の第一遊撃部隊主隊の隊形。駆逐艦の個々の配置位置は不明

ブルネイに停泊する第一遊撃部隊。右の艦首と主砲塔のみ見えているのは戦艦長門。そして順に高雄型重巡洋艦、戦艦大和、武蔵と並んでいる

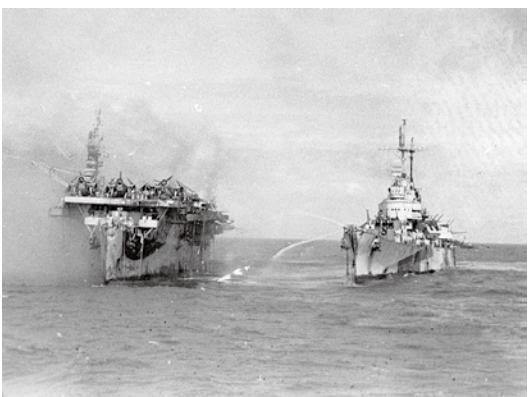
昭和十九年(1944)は終戦の前年のことになる。太平洋を戦域として、日本が米英連合国と戦つて、敗色が濃くなった年である。歴史を振り返ってみたい。

二月、米軍は太平洋に浮かぶマーシャル群島に上陸、ルオット島の日本軍守備隊は玉砕する。東條英機首相は、人心を一新するため、内閣改造。三月、インド北東のインパールを目指した陸軍の作戦では、悲惨な敗北を喫した。

六月、連合国軍は、イタリアーのローマを占領し、ノルマン



彗星艦爆の攻撃を受け大破した軽空母プリンスストン(左)とその救援に近づく軽巡バーミンガム(右)



日攻勢作戦を本格化した。日本では、米軍がサイパン島に上陸、マリアナ沖海戦で、日本海軍の空母機動戦力を喪失した。閣議は、学童疎開を決定。

七月、日本軍守備隊は玉砕する。東條内閣、閣内不一致とサリパン失陥の責任を取り、内閣総辞職。米軍、グアム島に上陸、つづいてテニアン島に上陸する。

八月、学徒勤労令、女子挺身勤労令公布。連合国軍、パリを占領。

シャルル・ド・ゴール、パリ入城。重要工場に疎開命令。

十月となり、フランクリン・ルーズベルト米大統領は、駐ソ米国外交を介してスターリンソ連首相に対日参戦を提案。兵役法施行規則改正公布され、満17歳以上の男子を兵役に編入(11月1日実施)。

レイテ沖海戦

10月23日~25日

太平洋戦争の緒戦では、戦争準備が整っていなかったアメリカは、日本軍の侵攻によってフィリピンを失うことになったが、1943年(昭和十七年)の後半、米国は戦時生産体制を整え、対

日攻勢作戦を本格化した。日本では、米軍がサイパン島に上陸、マリアナ沖海戦で、日本海軍の空母機動戦力を喪失した。閣議は、学童疎開を決定。

七月、日本軍守備隊は玉砕する。東條内閣、閣内不一致とサリパン失陥の責任を取り、内閣総辞職。米軍、グアム島に上陸、つづいてテニアン島に上陸する。

八月、学徒勤労令、女子挺身勤労令公布。連合国軍、パリを占領。

シャルル・ド・ゴール、パリ入城。重要工場に疎開命令。

十月となり、フランクリン・ルーズベルト米大統領は、駐ソ米国外交を介してスターリンソ連首相に対日参戦を提案。兵役法施行規則改正公布され、満17歳以上の男子を兵役に編入(11月1日実施)。

レイテ沖海戦

10月23日~25日

太平洋戦争の緒戦では、戦争準備が整っていなかったアメリカは、日本軍の侵攻によってフィリピンを失うことになったが、1943年(昭和十七年)の後半、米国は戦時生産体制を整え、対

このフィリピン攻略計画については、その指揮を務めたダグラス・マッカーサーが、フィリピンに多くの利権をもっていて、その奪還に強くこだわっていたという背景もある。

米軍はフィリピン攻略の足掛かりとしてパラオ諸島、モルッカ諸島に対する攻略作戦を展開し、モロタイ島に飛行場を含む前線基地を建設。十月には航空母艦(軽空母・護衛空母を含む)三隻、戦艦二隻を擁するフィリピン攻略任務部隊と、米陸軍第一の軍団からなる総兵力二〇万人の上陸部隊を乗せた船団が出撃し、作戦開始に備える。

シブヤン海海戦

十月二十四日、米艦隊は日本艦隊迎撃を主任務とする第二艦隊と上陸部隊支援を行う第一艦隊とに分かれ、遙か、南方のブルネイからパラワン島の北に沿って北上する日本海軍を迎撃した。ブルネイは、ボルネオ島の北方先端に位置し、豊富な石油と天然ガスに恵まれ、当時は日本軍統治下にあった。

のことになると夢中である。今度の投稿の切っ掛けはこの光一さんのお陰である。

次は公一さんの綴った一文で

飛行七三戦隊は北伊勢で編成された。大坂の現陸上自衛隊ヘリコプター基地八尾飛行場を経て所沢に移駐して来たのが十月だった。最後の地が故郷に近いと言った。比島には十四日に着いたことになるが、ここがはつきりしない。比島の初陣で五発の弾をうけミンドロ島とマバラカットの中間にあるリバ飛行場にいた七三戦隊の整備隊員に整備をもらい、次の日マバラカットに飛び本隊に合流とある。皆が光一の帰還をよこんで呉れたという。いつなのか知れない所である」

「深谷注記」 十二月四日 所沢を出て十日を費やし比島に着くという、比島には十四日に着いたことになるが、ここがはつきりしない。比島の初陣で五発の弾をうけミンドロ島とマバラカットの中間にあるリバ飛行場にいた七三戦隊の整備隊員に整備をもらい、次の日マバラカットに飛び本隊に合流とある。皆が光一の帰還をよこんで呉れたという。いつなのか知れない所である」

七三戦隊の追悼史を詠んで

七三戦隊の方々は本当に敵と戦って来た。この度の戦いにも参加はしたが、弾の下はくぐらなかつた人もかなりいる筈である。七三戦隊の人には志願兵の人が圧倒的に多かつた。志願で入った人は第一線で戦うという理論は理解出来る。光一のように十五歳十六歳で物事の判断も的確にできない少年を教育してしまえば、赤にも黒にも、なんの色にも染まってしまう。以下はその七三戦隊の印刷機関紙を読ませてもらい、私なりに書き直したものである。

光一は静かに拳手の札をして、故郷への郷愁を断ち切ると、すぐに前方を向き、ひたすら上昇を続けた。三隅飛行隊は見事な編成を組むと、一路最初の中継地である新田原に向かった。この間の飛行時間は約四時間であつた。新田原と台湾屏東で十日を費やし比島についた。飛行七三戦隊は十一月に所沢をたっていた整備隊の先遣隊がマニラ郊外のマバラカットに設営して戦隊の到着を待っていた。ここは最初の神風特攻隊の出た所であつた(関大尉の率いる海軍の敷島隊)。七三戦隊も次々に到着したが、途中の悲劇もまた多かつた。整備隊員をのせた九七重爆撃機がマバラカット着陸寸前、グラマン戦闘機に襲われ、二機は自爆、一機は不時着したのである。このため整備隊長栗田大尉、伊藤大尉など多くの隊員が死亡さ

れたが、これは七三戦隊にとつて大きな悲しみというより大きな損失であつた。航空機が敵方に渡つた今、戦隊のこれからの苦闘を暗示させる出来事だつた。

「深谷注記」 十二月四日 所沢を出て十日を費やし比島に着くという、比島には十四日に着いたことになるが、ここがはつきりしない。比島の初陣で五発の弾をうけミンドロ島とマバラカットの中間にあるリバ飛行場にいた七三戦隊の整備隊員に整備をもらい、次の日マバラカットに飛び本隊に合流とある。皆が光一の帰還をよこんで呉れたという。いつなのか知れない所である」

サンホセに散る

当初はお粗末な日本軍の飛行場があつたという。光一の戦死の場所はサンホセになつてゐるが、十二月二十日現在ではサンホセを放棄して、基地はマバラカットにあつたのではあるまいか。それとも何機かがサンホセにいたのだろうか。

三隅戦隊長が二度目の特攻を光一に命令したとき、光一は従容として変わるところが無かつたという。この辺が腑に落ちない。光一の戦死は比島到着後四日目であつたと伝える。明野の飛行学校教官を主力に構成された七三戦隊は日本最後の操縦者集団だつた。この七三戦隊が負けるのである。

七三戦隊も次々に飛行機と搭乗員を失い、二十年一月八日三隅戦隊長も直掩機として出撃したが、多数の敵機の中に突入、二機を撃墜しながらも、衆寡敵せず帰らぬ人となつたという。三隅戦隊長の戦死は七三戦隊の壊滅を意味したのである。このころ富永第四総空軍司令官は密かに台湾への撤退(逃亡)を考えていたのである。

富永司令官の撤退は本来ならば敵前逃亡の罪に匹敵すると言ふ人も有るくらいのものであつたのである。

光一は下士官だつた。二本の軍隊の強かつたのは下士官が優



部下を従えて上陸するマツカサ大尉。彼が本格的に司令部をレイテに置くのは25日になつてからだつた

日本の連合艦隊の攻撃主力となるよう命じられた第一遊撃部隊主力の第一部隊(栗田艦隊)・第二部隊(鈴木部隊)は、その前々日二十二日、補給を完了してブルネイを出撃し、遅れて第三部隊(西村艦隊)も出航した。

ところがパラワン水道で、大きな悲劇が待ち受けていた。大和田通信隊(昭和十六年、埼玉県新座市、東京都清瀬市に開設され、日本軍のみならず米英の無線も傍受して解読していた)から敵潜水艦の緊急通信を傍受したとの連絡を受け取る。

二十三日未明、栗田艦隊はパラワン水道を通過していったが、米海軍の潜水艦、ダーター(Darter)とデイス(Dace)のレーダーで発見される。栗田艦隊の旗艦、重巡洋艦の愛宕は、潜水艦の電波を探知したが、ダーターが放つた魚雷を右舷に受ける。愛宕は、電源が停止し、重巡は急速に右に傾く。遺憾乍ら司令部が退去して、総員退去命令は出されなかつた可能性が高い。栗田中将、小柳参謀長、荒

木艦長以下の生存者は、駆逐艦の岸波が28名、朝霜が11名、救助されたが、愛宕は9時の分に転覆して沈没し、機関長の堂免敬造中佐以下38名は戦死。なお、ダーターは高雄にも魚雷を命中させ、高雄を漂流させたが、自らは航法を過つて座礁。曳航不能となる。幸い、岸波に救助された愛宕の生存者は戦艦大和に移乗することができた。

栗田艦隊の旗艦となつた、戦艦の大和は、二十四日早朝、シブヤン海に差し掛かつて、米軍の偵察機を発見、互いに電波妨害を開始した。栗田艦隊は航行のスピードを上げたが、十時半ごろ、米軍第二群、空母5隻を基幹とする戦闘機、爆撃機ほかから激しい攻撃を受ける。栗田艦隊は、戦艦大和が発砲し、続いて各艦も砲火を開く。

十二時ごろ、米空軍の第二次攻撃が始まり、第二次、三次、四次、五次の攻撃は激しさを増した。米軍は戦艦武蔵を主な標的とし、武蔵の砲火は、米軍機十数機を撃墜した。しかし、武蔵は大損害を蒙り、各艦とも甚大な損傷のため、栗田艦隊は、一次、二次の反転を試みたが、夕刻、六時ころから、武蔵は傾き始める。七時半には総員退艦して、ついに沈没した。艦長は艦と運命をともにしたが、乗組員千名以上は護衛艦によって救助された。

エンガノ岬沖海戦 十月十九日、内地に残置していた錬成中の航空隊を集め、小沢中将率いる機動部隊(三航戦(瑞鶴を加えた最終編成)、四航戦(航空戦艦伊勢、日向)、軽巡洋艦、大淀、五十鈴、多摩、駆逐艦

〇隻は瀬戸内海を出撃、翌二十日、大分沖でえ航空機を收容して日本本土を離れ、敵潜水艦の哨戒網の穴をすり抜けてフィリピン近海へと南下を続けた。

航空戦力の激減していた小沢艦隊の作戦目的は、フィリピン周辺海域を遊弋するハルゼー指揮のアメリカ海軍第三艦隊(空母二隻、アイオワ級戦艦をはじめ護衛の艦艇多数)を見付け出し、それを北方海域まで誘致、基地航空部隊と協力してこれを攻撃殲滅して、遙か南方方向でアメリカ軍上陸地点と推測されるレイテ湾に突入する、日本艦隊の主力、栗田艦隊を支援する、というものだった。すなわち、囷としての任務だった。

しかし、小沢艦隊による作戦が実行に移される以前に、ハルゼー機動部隊は、栗田中将が指揮する大和、武蔵、長門、金剛、榛名の戦艦四隻、妙高、熊野、利根などの重巡二隻を擁する第一遊撃部隊(栗田艦隊)を発見して、二十四日、シブヤン海で猛攻撃を加え、戦艦武蔵を撃沈したのである。このことは、上記した通りである。

ハルゼー機動部隊が栗田艦隊を空襲している頃、小沢機動部隊もハルゼーの部隊を発見して、なけなしの艦載機を発進させ、敵機動部隊への攻撃を行ったが、日本海軍機動部隊として最後の航空攻撃となつた。空母、瑞鶴の攻撃隊は迎撃網を突破して、ハルゼー部隊への攻撃に成功するものの、戦果といえば、至近弾数発のみだった。

スリガオ海峡夜戦 西村中将指揮の第二戦隊(戦艦「山城」、「扶桑」)は、当初、第一遊撃部隊(栗田艦隊)の主力と共に進み、一緒に突入する筈だつた。しかし、その余裕が無く、最短ルートで挟撃することになる。第二戦隊を主力とする第三部隊(通称西村艦隊)が急遽編成され、北方からレイテ湾に突入する栗田艦隊と呼応して、スルー海(パラワン島の南方)を経由、スリガオ海峡からレイテ湾に突入することになった。

「山城」、「扶桑」、重巡洋艦「最上」、第四駆逐隊(駆逐艦「満潮」「朝雲」「山雲」)、第二十七駆逐隊(駆逐艦「時雨」)の計三隻からなる第三部隊は、二十二日午後、ブルネイを出撃、途中で米機の攻撃を受け、「扶桑」、「最上」に着弾したが、航行を続けて、二十四日午後二時、スルー海の東端に到達した。

一方、行く先のスリガオ海峡には、オルデンドルフ少将率いる水上打撃部隊が展開しており、ウェストバージニア・メリーランド・テネシー・カリフォルニア・ミシシッピ・ペンシルヴェニアの改装済み旧式戦艦の隻の他、旗艦ルイビル、以下重巡洋艦二隻、軽巡洋艦二隻、駆逐艦二隻、魚雷艇二隻で構成された大艦隊が、鉄壁の迎撃態勢を敷いて待ち構えていた。

一方、上記したように、シブヤン海で米機動部隊艦載機からの猛攻撃を受けた栗田艦隊は大損害を被つて、一時反転したので、レイテ湾突入は遅れた。遅延を知った西村司令官は、栗田長官に報告したが、指示は無く、第三部隊は、予定時刻に単独で、敵艦隊の待ち受ける夜の

秀で有ったことだと言われている。将校より下士官が優秀であったことも多々あったであろうが、歩兵などの場合は、幹部候補生上がりの将校でも戦死してしまうと、下士官には小隊を纏める力もなくなつて支離滅裂になつてしまうという。

陸軍機の操縦の主力は下士官であつた。将校一に対し下士官は三の比率だったという。が、戦局の悪化により少年からの養成では間に合わなくなり、世に言う特別幹部候補生の制度が出来て、専門学校や大学在学中の学徒が志願応募して、光一のような下士官に訓練を受けて戦場に赴いたのである。

飛行技術は普通操縦時間に比

例する。一年間二〇〇時間が標準で、二〇〇時間で実用機の操縦が可能となり、四〇〇時間でヤット戦闘に参加可能になり、六〇〇時間になるとどんなことも可能になるという。しかし実戦経験が不足なので不覚を取り、

この時に戦死するものが多かったという。陸士五十五期ぐらいがこれに相当したという。私は大正十三年の生まれだから、陸士に入つていたとすれば五十七期ぐらいになる。ヤットコ飛べるくらいで戦線にいったなら、グラマンに落とされていたに相違ない。

光一の幼な友達

光一の友達も七十四歳七十五歳になつてしまつた。光一のことを調べるべく新井康一さんに電話した、光一さんより一つ上という。田川屋の武蔵さんが親友であつたという。大和田に住まいの田中さんに色々と伺えた。高等科を卒業するときの文

集も見せて戴いた。酸性紙で五十余年をたつとボロボロである。上等兵になり帰郷したとき

二人で撮つた写真も赤くなつて残されていた。光一が楷書で書いた習字も二枚保存されていた。二枚とも光一の甥公一に手渡された。親友とはこういうものである。公一が入学するときの記念写真には、光一は真ん中に

て、右に吉野家眞服店の子(桑原)、左に宮川書店の前の店主、後ろに四名確認出来るのは大宮在住の三上喜一郎、村上英次(故)、三枝政雄(上福岡在住)の三名である。小学校の友達が光一の入学を祝つて記念の写真を撮る、友情も隣人愛も失つた今の子供

たちに学んで貰いたいと思う。光一は志木小学校に昭和六年入学する。時の校長は織田という人だった。一年の時は男女一

緒の編成、五年生から分けたらしい。四年生のころ校長が交替して宮原吉之助が赴任した。この宮原校長は秩父の出身で、師範学校の優等生で県視学などを歴任した県教育界の大物だった。四年の担任は尾崎吉之助、

子供は光一より二ツぐらい下にいた。五年生六年生の担任は大和田の榎本兵五郎で、この先生が高等科一年二年と持ち上がる。四年続けて担任となつた。卒業記念の文集作りに光一、新井光蔵、栗原孝吉などがある。新井

さんは上町の新井洋服店の店主さん、新井康一さんの弟で、康一さん同様文学に長けた人とお見受けした。子供の時の康一の運動神経のすばらしさ、人への思いや

りを語つてくれた。栗原孝吉さんは今川越に在住、六十九歳から絵画の勉強を始め

た由。光一が朝霞地区大会で走り幅跳びで優勝したはずですと語つてくれた。

浅田尚一さんは延々と「賢く機転の効く光一」を語つてくれ、一度お会いしてお話し合いを致しましう、とまで言つていた。どなたに伺つても光一のことは褒める人ばかり、生か

しておきたかつた。今の平和の日本を見せてやりたかつたと請う人ばかりであつた。誠忠院義烈光照居士

二十歳になるか成らぬかの人生であつた村山光一。日本の国のためという、分かつたような分らないような言葉。何が日本の為になるのか。日本は負けたじゃないか。

戦前の日本に比べて 今の日本人は奇麗な着物を着て、一年に二回か三回きり食べなかつた、うまいものを毎日食べているではない。負けたつて何のこともなかつたではないか。

光一よ、悔しかろう。戦いすんで五十何年、あんたのことを後世の人に伝えておこうと調べてみたよ。しかし分からないことばかり。あなたの特攻から遺骨は帰らないはずだよ。それでも儀式として白木の箱と一枚の光一の霊ぐ

らい書いたものが届いたはずだ。葬儀は二十年の六月に行われたそう。場所も時間も参列者もわからないよ。

時の流れはこわいもんだね。みんなないんだから。今は人と違う臍曲がりの事をいう人がお金になる時代になつたよ。

あなたのことを帝国主義に染められた思慮分別を欠いた青年の一時の衝動的行動と言うが、言いたい人には言わせておこう。

一生懸命やつたんだ。後世の人が何と言おうと、やつたんだ。青春だつてあつたよ。靴紐のむすびかた、帽子の被り方にも

女の子はモンペの紐も真ん中で結ばず、右にやつたり左にやつたり、一寸したオシャレだつたね。風蕭々して易水寒し 壮士二度去つて再び還らず

来年にでもこの続きを書いておこうと思う。先になれば成るほど知つている人がいなくなる。六つ違いの栄三郎兄さんの長

男公一さんと親友だったという田中武蔵さんのお陰でこの拙文をかきました。開き鬚りの文章でお恥ずかしい。友達もみんな七十四歳七十五歳になりました。

編集者の注記

以上の深谷さんの論文を転載させて頂くため、当時から『郷土志木』の編集を担当され、志木市郷土史研究会長の井上国夫氏を訪ねたとき、貴重な話を伺つた。深谷さんの論文が投稿されたとき、慣例によつて、有識者に審査を依頼したところ、原論文に、多くの赤が入つて返つてきたのである。

しかし、投稿された原著者の深谷氏は、審査の赤を拒否されたので、通例では、原文の掲載は不可となる筈だつた。井上氏の判断で、この貴重な原論文の大意を読む事が可能になったことは、幸いと云わざるを得ない。

ようやく栗田長官から電報が旗艦「大和」から発信されたが、第三部隊は、二十五日米魚雷艇との戦闘を開始しており、手遅れとなつた。午後二十三時ころ戦闘は始まつたが、視界は不良で、敵艦隊は煙幕を張つたため、西村艦隊の照準は不良、対する米軍の魚雷は的確で、「山雲」が轟沈、「満潮」「朝雲」は大きく傷ついて沈没した。

内地から出航し、遠路南下して、ようやく午前三時を過ぎて四時近く、スリガオ海峡に到着した志摩艦隊が見たものは、闇とスコールの中、炎上する「最上」、真つ二つに分かれて燃えながら漂流する「扶桑」、あちこちで上がる炎。状況を確認しようとする志摩艦隊に更に悲劇が起

こる。志摩艦隊の旗艦「那智」と後退してきた「最上」の衝突事故が発生。志摩艦隊は混乱して、志摩提督は撤退を決定する。米艦隊の追撃は日が昇ると始まり、西村艦隊はほぼ全滅した。

太平洋戦争で、最も凄惨な海戦と云われ、内地から出航して到着した志摩艦隊の視たものは、地獄の絵図であつた。であつたにも拘らず、二十五日早曉から、

サマール沖海戦は・・・十月二十五日早朝、フィリピン中部のサマール島近海で、進撃を続けていた栗田艦隊(第一遊撃部隊の第一部隊、第二部隊)と、その進路上のアメリカ海軍第「艦隊から編成された、護衛空母艦隊の一つ、(コードネーム「タフィ3 Taffy 3」で知られている)」が遭遇したことによつて生

起した。パラワン島近海の潜水艦から

の雷撃と、シブヤン海海戦での空襲によつて戦力を消耗した栗田艦隊は、一時反転していた。しかし、アメリカ海軍第「のハルゼー艦隊は、栗田艦隊が撤退したと判断して攻撃を終了して、小沢艦隊撃滅のために北上する。好機を得た栗田は、再度反転してレイテ湾への進撃を再開した。

タフィ「は、護衛空母の隻、護衛駆逐艦「隻、駆逐艦「隻からなる部隊で、輸送船団の護衛や対潜哨戒などの後方支援を担当する部隊だつた。

日本海軍の第一遊撃部隊は、戦艦の大和、長門、金剛、榛名、重巡洋艦の羽黒、熊野、鈴谷、利根、筑摩、島海ほか。黎明の遭遇

午前六時半頃、付近で活動中の米艦載機を探知し、栗田艦隊は対空戦に備えて輪形陣を取り始めた。その最中にタフィ「を発見した栗田艦隊は、攻撃命令を下す。一方、タフィ「は、警戒態勢を解除し、通常配置に移行していたが、接近する栗田艦隊を発見し、の隻の護衛空母は混乱状態に陥りつつも艦載機の発艦作業を急がせた。

撤退禁止指令という死守命令を受けたタフィ「は、全艦煙幕を展開し、回避と艦載機の発艦を行い、栗田艦隊からの苛烈な攻撃から生き残つた。

双方の陣営が死闘を繰り返したが、栗田は再集結を命じて攻撃は中断された。栗田艦隊は反転し、レイテ湾への突入を中断して北上する。再度反転してレイテ湾突入を試みるが、既にアメリカ海軍増援部隊が動き出していたため、突入の機会は失われていた。

残存艦は現地に留まるもの、再反撃や輸送作戦に使用されるものの、本土に回航されるものと振り分けられた。しかし、レイテ沖海戦そのものの敗北によつて、南シナ海は潜水艦と航空機が跳梁跋扈する危険海域と化した。本土に戻らなかつた艦は、多号作戦や礼号作戦といったフィリピン方面の戦闘や、ベトナム、マレー半島方面での戦闘で、さ

に失われていくこととなる。レイテ島の陸上の戦いは・・・大岡昇平著『レイテ戦記』(中公文庫)によつて、その概要を知ることができる。

太平洋戦争の天王山と呼ばれ、日本軍八万名もの戦死者を生み出した(対して米連合軍の戦死傷者は一万五千名)。本書は、レイテ島における死闘を、膨大な資料や多くのインタビューを取り、それらを紐解いて再構築したものである。ただし、大岡は仏文学者として活躍中、召集されて、フィリピン・ミンドロ島に派遣され、米軍の捕虜となつて復員した。大岡の作品『俘虜記』、『野火』などが、作者の実体験であるのに対して、『レイテ戦記』は、

レイテ島で死闘した末に死亡した兵士達の鎮魂碑を打ち立てようと、渾身の力をもつて執筆したものである。

「市民フォーラム」の活動

「市民フォーラム」は、地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によつて市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

TEL 090 (3048) 5502 編集部原宛にどうぞ